

教会は大震災にどう関わったのか
—— 3・11 支援教会、教団のリーダー達に聞く ——

渡辺 聡

リサーチのコンテキスト

2011年3月11日東日本を襲った大地震は、巨大津波を伴う事によって東北、関東の沿岸地域に甚大な被害をもたらし、さらに津波による福島第一原発事故はこれまでの自然災害の枠を超えた深刻な社会問題を引き起こした。行政や民間ボランティア団体と共にキリスト教界からも様々な形での支援活動がなされたが、震災から1年を過ぎた現在、各教団のこれまでの活動の実態を総括することは、今後の支援活動の方向性を見出すために必要であろう。しかし各教会の働きは多様性に富み、数多くの教会が同時に支援活動を行っているから、それらの活動全てに言及し包括的にレポートすることは不可能である。そこで、活動を展開した教会のうち代表的とみなされるグループを複数サンプリングし、そのリーダー達にインタビューを行う事により、その全体像を大まかに把握するよう試みることにした。

今回インタビューに応じていただいた方々は、日本基督教団、日本バプテスト連盟、南部バプテスト宣教団、日本バプテスト教会連合、日本バプテスト同盟、日本同盟基督教団、日本ホーリネス教団、日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団に属する人たちで、直接支援に携わった経験を持つ教団リーダーや教会の牧師たちである。インタビューは基本的に個人に対して行ったが、教団

のリーダーだけでなく現地の活動責任者が同席するというケースも複数あった。インタビューはそれぞれ1時間ほどのもので、大まかなインタビュー・ガイドを用いて経験や意見を聞いた。またインタビューを行った期間は、2012年1月から5月上旬にかけてである。インタビューはICレコーダーに録音記録された¹。

また、日本バプテスト連盟についてはその教団のリーダーとは別にそれに属する各個教会のひとつである東京バプテスト教会の宣教担当牧師にもインタビューを行った。日本バプテスト連盟という同一教団内ではあるが、それぞれ異なる立ち位置でのユニークな支援活動がなされていることから、別のグループとしてインタビューをする事にした。

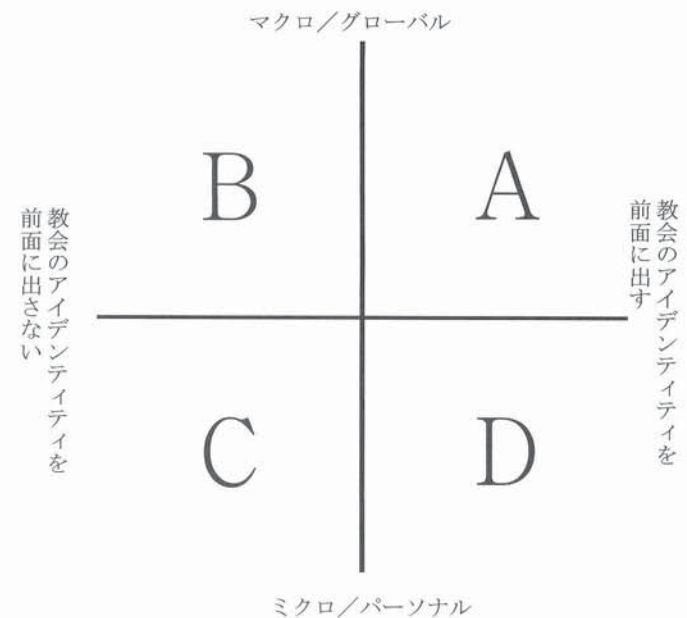
4つのタイプへの類型化

インタビューを整理する際に、それぞれの教団の傾向を把握しやすくなるように、それぞれのグループの震災への取り組みの態度を4つのタイプに類型化した。縦の軸にそのグループが社会問題に対しグローバルな関心を有しているか、ミクロな関心を有しているかという理念系を設定した。グローバル的であるとは、震災への関心が原発事故のような社会的な側面に置かれていることであり、政府への抗議文の送付や講演会を行ったり、日本の倫理的退廃や異教文化に対する神の裁きとして震災を捉えパブリックな場で警告を発するというように、被災者へのパーソナルな関係というよりは、より客観的で距離を置いた方向性を持つということである。それに対してミクロ的であるとは、ある特定のコミュニティに腰をすえ、そこで出会った特定の人々と親密な人間関係を築き、その中で支援をしていくという方向性である。インタビュー中に「あなたのグループは原発事故に関して、政府に抗議文の送付を行ったり、講演会を主催したりしていますか」という質問をし、それに対する返答の内容に基づいてカテゴリー分けをした。グローバルとミクロの対比によってそれぞれの教団が被災者に対し第3者的で距離を置いた対応をしているか、それともパーソ

¹ 例外は南部バプテスト宣教団で、インタビューは2011年7月に行われ、インタビューの記録は筆記メモのみである。

ナルな関係を持って対応しているかという態度の違いを見出すことが出来るかもしれないと考えた。

次に伝道に対する態度を、横軸に理念系として設定した。被災地で出会った人たちに対し、救いを得るために罪を悔い改めて神に立ち返れというメッセージを明確に宣教するグループがあり、それとは対極的に伝道はせず、自分達をキリストの愛を实践する援助者として捉えるグループがある。それは自分達の語るメッセージの内容に価値を置いているのか、実践している行為の内容に価値を置いているのかという点からの対比としても捉えることができる。インタビュー中に「あなたのグループでは支援をする際に、罪と悔い改めやキリストを信じることの大切さを被災者に言葉で伝えようとしていますか?」という質問を用い、それへの応答を見てカテゴリー分けをした。



この2つの軸を基に4つの理念型を設定すると、それぞれは以下のようなイメージとして捉えることができる。タイプA（第1象限）：神の裁きを強調し、

人々の悔い改めを求めるが、それはパーソナルな関係を基になされるのではなく、パブリックな場での言葉での宣言としてなされる。悔い改めるべきは、日本国民や為政者であり、また神の御心から倫理的に逸脱した日本文化とその担い手である。ひとつの例としては、クリスチャン新聞によって「ドイツ系異端」のメンバーが、東京、大阪、被災地の教会、キリスト教団体、避難所に入り、現場を困惑させたという例が報告されている。彼らの主張は、「今回の震災は神の裁きである」、「罰は神の愛だ」、「さばきを伝えないクリスチャンは裁かれる」といったもので、支援活動をしている教会の礼拝中に現れ、マイクを握ると、彼らの主張を一方的に語り、去っていくというものだ²。ただしこのリサーチでは、タイプ A に属するグループに直接的にインタビューをする機会は得られなかった。タイプ B (第 2 象限) は A と同様にグローバルであるが、より社会政治的な側面に関心を持ち、自分達の意見を発信する対象も政府や行政機関であり、被災者に対して個人的な関係を深めていくというよりは、講演会やシンポジウムといった活動に関心を持つグループである。タイプ C (第 3 象限) は、被災者の傍らに寄り添い物心両面でサポートするが、キリスト教的なメッセージを直接言葉で伝えることを控えるグループである。それに対しタイプ D (第 4 象限) はタイプ A と同様に自分達の宗教的アイデンティティを前面に出し、相手にキリスト教的メッセージを言葉で伝えるが、方法論的にはよりパーソナルで、被災者に寄り添う形での支援を行っているグループである。

ただしこれらの類型を用いるとしても、タイプ B に分類されたグループが被災者に対する直接的な炊き出しや心のケアをしていないと言っているわけではない。また、タイプ D が宣教活動だけ行っていて物質的な支援活動を行っていないということでもない。また支援活動の時間的な経過と共に、タイプ C がよりタイプ D に近づくという例や、タイプ B がタイプ C に近づいていくという例も見られる。

さらに、タイプ分けについては、インタビューした教団に対する一般的な評価によってではなく、あくまでもインタビューした個人の回答の内容に基づい

² 「注意。『神のさばき』『あなたの罪のせい』主張のグループに被災地困惑」
<http://jpnews.org/pc/modules/mysection/item.php?itemid=223>

て行っている。このリサーチの目的は、上記のような方法で類型化されたグループ間の比較をおこなうことであるので、回答者の発言には匿名性を持たせている。インタビューした複数の教団が同一のタイプに属する場合、(B-1)、(B-2) や (C-1)、(C-2) ……のようにタイプを表すアルファベットを最初に記し、次に数字で異なる教団を区別し、また同一教団内に複数の回答者がいてその発言を引用した場合は (B-2-1)、(B-2-2) のように記して回答者を区別している。

支援活動の経過

3月11日の震災によってもたらされた大きな混乱の中で教会の支援活動はそれぞれ手探り状態で開始された。多くの教派はまず自派に属する東北の教会への安否確認を開始した。情報が混乱する中、直接現地入りして様子を把握しようとした牧師たちもいた。「国道6号線を避難者の車で渋滞する反対車線を横目に見ながら北上した。翌週は仙台に入り、次いで石巻に入った。当時報道でボランティアは現地に行くべきでないという情報が流され、教団内からも『迷惑になるのでは』という声が上がったが、行ってみると『猫の手も借りたい』という状況だった」(B-1) とある教団の支援担当者は試行錯誤で活動を始めた当時の様子を振り返る。

現地の教会はさらに混乱の只中であつた。「渦中にいながら状況が全く把握できなかった。ニュースは何日もたってから入ってきた。巨人か怪獣に振り回されているかのような感じだった。信徒の安否の確認、保育園の子供の引き渡しなど深夜までかかった。自分の生活圏の中でも何人もの人が亡くなっている。混乱と非常に緊張の中での時間だった」(C-1) と、現地教会の牧師は語った。

福島原発事故は、そのような混乱にさらに拍車をかけた。いわきに支援物資を届けたあるグループは「情報がないうまま、とりあえず線量計を身につけて現地の教会に物資を届けた。現地の教会は放射能についてまだ状況を知らされていないようであった。自分たちも被ばくするのではないかとかなり緊張感があった」(D-1) と言う。また、福島県外であっても、被災した地域では、正確な情報が得られないために混乱があった。「女川(原発)の情報が脅威だった。福島の情報も断片的にしか入らなかった。福島原発のせいでのあたりも危

険だというようなデマが飛び交った。自衛隊が出動しているというのは嘘でこの辺りは見捨てられたというデマもあった。たまたま海外からのEメールがつながると『逃げろ』と言う。非常に緊張感があった。6月までそのような感覚が続いた」(C-1)。

そのような混乱の中ではあったが、多くの教団では直ちに支援本部が立ち上げられ、情報の発信と支援金の受け取り、物資やボランティアの派遣等が組織的に行われるようになった。当初は自派の教団内での情報収集や支援活動が活動の中心であったが、次第に教団、教派の枠を超えた支援活動を行うグループが現れ始めた。教派を超えたネットワークの形成には「フェイスブックやツイッターが威力を発揮し、また牧師たちの神学生時代の教派を超えた個人的なつながりが役に立った」(B-1)。また、阪神大震災の反省が積極的に生かされたケースもあった。「阪神大震災では支援活動が自分の教団内だけで行われていたという反省から、教派に関係のないところにも手を伸ばす必要があると考え、それを踏まえた新たな行動マニュアルがすでに全国の教会に送られていた。それによって以前よりも広く迅速な活動を行うことが出来た」(C-2-1)という。

諸教会による初期の主な活動は避難所への炊き出しと物資の支援であった。キリスト教のNGO支援団体が現地入りすると、それらのNGOに協力してボランティアを送る教団や教会も増えた。また現地の教会ではボランティアに宿泊場所を提供したり、事務所を設けてボランティアの受け入れを手伝ったりした。

夏に向かい支援の場は避難所から仮設住宅へと移って行く。同時に津波で家を完全に流されることのなかった在宅被災者への支援の必要性も明らかになっていった。道路が復旧し食糧が地域に供給されるようになると、支援は炊き出しから瓦礫の撤去や泥かき、壊れた建物の修復といった内容に移っていく。

夏も終わりそれらの活動が一段落すると、教会の活動はハンドマッサージやカウンセリング、子供の学習支援といったソフト面にシフトしていった。2012年に入り、日本国内および海外からのクリスチャンボランティアの数も減り、支援内容も緊急性を求められるものから、長期的な展望を必要とするものに移り変わってきた。その中で、教会はこれからの支援のあり方について模索する時期に入っているとみえる。

人との出会い

タイプBに分類したある教団のリーダーは自分達の支援を「神との関係の回復」、「人と人との関係の回復」「原発立地で不自由している人たちとの関係の回復」として捉えた(B-2-1)。彼らが被災地に行くのは「そこでイエス・キリストに仕え、人々に仕えるためである。イエス・キリストがすでにそこに行って働いているので、イエス・キリストを探しに行く」、また「ここにもイエス様がいるのだなということを見出すために行く」のだという(B-2-1)。そして「被災者が単にかわいそうだと思って行くのではなく、彼らとの関係の回復の中で私たち自身の生き方を変えることができるように出かけていく。私たちが東京でちゃんとしていくためには、私たちの生き方が問われているのである」と述べる(B-2-1)。このように、支援の動機は、人に仕えると共にそれを通じた神学的な自己反省の機会を得ることである。

「支援活動を行うとき、あなたにとって最も意味を持つ聖句は何か？」と聞いた時、Bタイプの回答者は「(イエスは)まず人の痛みに触れて涙を流す。(苦しんでいる人たちと)同じ立場で神に祈る。だからそこにいた人たちにイエスの祈りは響いたのだ」(B-2-1)という。また同じ教団の支援責任者は、使徒言行録27章を示し「船が難破した時、元気を出せ、どこかの島に打ち上げられるはずだと、何の根拠も持たず信じているパウロの姿が印象的である。彼は、不安に陥っている人々の中で道化のような役回りをしている。自分達の働きもそうでありたい」(B-2-2)と答えた。これにみられるようにBタイプの一つの特徴は、支援活動そのものに加えて苦しんでいるものの傍らに立ち、自分達もそれを共有する事に重点が置かれているということである。

Bタイプのインタビューを通じて感じたのは、彼らが被害者とのパーソルなつながりよりもコミュニティ全体の課題というような、よりマクロな視点から現状を分析している点である。現地の人たちとの関係については、「初期のハネムーン期がしばらく続いたが、その後避難所のリーダーが行くたびに疲れている事に気がついた」という。彼らが支援していた現地リーダーは仲間から「嫌われていた」人だったというのである。「自分達がリーダーを支援することで、コミュニティを壊してしまった」という反省が述べられた。彼らは「違う漁村